

---

# 約束

黒川貴史

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

約束

### 【Nコード】

N5082Q

### 【作者名】

黒川貴史

### 【あらすじ】

彼女は言った。

「わたしは神さまに愛されたのかな、それとも悪魔に愛されたのかな・・・」

これはぼくの運命の物語。

これは彼女の悲しみの物語。

これはぼくと彼女の、たったひとつの物語。

## 「神社」

ぼくとランちゃんはある約束を交わした。いつも二人で遊んでいる神社の隅っこ。控えめに、しかし凜とそびえた桜の木の下。淡いピンクの花びらたちに囲まれて。花のじゅうたんの上で交わした約束。

## 第1章「神社」

ぼくの住む町は都心から離れたいわゆるベツトタウンというやつだ。家々がこれでもかときゅうぎゅう詰め建ち並び、昼間は人なんてほとんど歩いていないのに、夕方ごろになると家に帰っていく人たちで道はあふれかえる。いったいこの人たちはどこからやって来たのかとぼくはその光景を見るたびに変に関心してしまう。ぼくのなかの七不思議のひとつである。

そんな住宅地を通り抜けてぼくはいつも小学校に通うのだが、その通学路の途中には神社がある。この町を流れる風や、空から流れる雨に打たれ、長い時をそこにたたずみ皆を見守ってきた鳥居、そして本堂。

ぼくの父に言わせればこの神社は「威厳に満ちている」らしい。ぼくが今より小さいときに父と二人でこの神社にお参りしたときに父が言った言葉だ。しかしぼくは「威厳」という言葉の意味がよくわからなく、父にその意味を聞くと、「堂々としてるって意味だよ」と答えた。ぼくはその父の答えを頭に刻みながら改めて神社を見渡した。木々に囲まれ、清らかな空気をただよわせる神社。古いがちゃんと清掃されている参道。それらを見てみると「威厳」という言葉の意味がぼくにもだんだんわかってきた。「そうだね！この神社

にはいげんがあるね」とぼくは父に言った。父はにつこりと笑った。それからぼくは学校からの帰り道、よくこの神社に寄り道するようになった。別にたいした理由はなかったけれど、ここに来るとなんだか気持ちが悪く落ち着くのだ。休日には参拝者もちらほら来るが、平日にはだれもいない。まるでぼくだけの秘密の場所のように感じた。学校、外の世界から離れた秘密の空間。ぼくはそこでなにをするでもなく、ただ本堂につづく階段に座り、深呼吸し、ぼーっとあたりの景色を眺めていた。

ぼくがランチちゃんと出会ったのもこの神社だった。

夏が近づき、青々とした新緑が目まぶしい季節。かんかんとした太陽の光に誘われ、地上にでてきたセミたちの大合唱と、生ぬるい南風に体を包まれながら、ぼくはいつものように階段に腰掛けていた。

だけどその日はかりは何も考えずにぼーっとしているわけにはいかなかった。ぼくの手には今日先生から返されたテスト用紙が握りしめられていた。ぼくはそのテスト用紙を見つめながら深いため息をつき、「怒られる」と小さくつぶやいた。ぼくは自慢じゃないが、けっして頭がいいほうではない。だけどとてつもないバカでもない。・・と自分では思っていた、今日までは。

「だって10点だもの」

ぼくはまた小さくつぶやき、日々のなまけた生活を悔やんだ。そして今日家に帰ったときの母の怒った顔が目もありあり浮かび、さらに重い気持ちになった。

ぼくの母は普段はほんとうに優しい、笑顔のたえない陽気な母だ。近所でも、ぼくの友達の間でも母は大人気で、あんな若くて優しいお母さんがいてうらやましいと聞きあきるぐらい言われてきた。確かにぼくも母がぼくの母でほんとうによかったと思っっている。けど勉強の成績のこととなると話は別。笑顔が一転まさしく鬼のような形相になり、顔を真っ赤にして怒鳴ってくるのだ。これもぼくの

七不思議のひとつだ。

この前のテストで40点だったとき、夕方から夜にかけて延々と説教されたばかりなのに、10点のテストなんてみせたらどうなってしまふのだろうか。この世が終わってしまうのではないだろうか。いつそうテストなんてなかったことにしてしまおうか。いやいやまて、母はいつテストがあるのかを完璧に知っている。ぼくなんかよらずと。なかったことになんてできわけがない。どうしよう・・・。

ぼくは座りながらずっと悩み続けた。まわりのセミたちはそんなぼくのことなんておかまいなしに楽しそうに歌っていた。セミたちが地上に出てくるかわりに、ぼくが地面の中にもぐりたい気分だ。セミさん、ぼくが君たちのかわりにあなたたちのお家に住んであげよ。だからかわりにこのテストを母に渡してくれる？

そんなどうしようもないことを考えているとき、ふと見つめた神社の隅っこにひとりの女の子をみつけた。青々とした葉っぱが生い茂る木の下、女の子はランドセルを横に置き、そこに腰をおろしていた。そして下を向き、手に開いた本を熱心に読んでいた。

誰だろう？

知らない子だった。

ランドセルを横に置いてるところをみるとぼくと同じ小学生だろう。しかもここにいるということは同じ学校に通っているということだ。この付近に小学校はぼくの通う学校しかない。次に近い学校でもここから何キロも離れている。そこに通う子供がわざわざランドセルを背負いながらこの神社に来るはずがなかった。

ぼくと違う学年の子だろうか。だけど、ぱっと見る感じ同級生のようにも見える。ぼくの学年は2クラスで人数もそんなに多くない。だいたいの子の顔は覚えていた。ぼくはあたまをフル回転させてひとりひとりの顔を思い出してみた。だけどやっぱりその子のことをぼくは知らなかった。

ぼくはすくつと立ち上がり、その子のもとへ歩いて行った。その

行動には自分でも驚いた。ぼくはけっこう人見知りするほうで、知らない子に話しかけることなんて今までまったくできなかった。しかも相手が女の子ならなおさらだ。それなのに自然と体が動き、あの子と話してみようと思ったのだ。たぶん話し相手がほしかったからだろう。誰でもいいから、今の自分のこの不安を誰かに話して少しでも気を紛らわしたいのだろう。ぼくはその子のもとに向かって歩きながらそう自分を分析した。

「なに読んでるの？」

ぼくはその子の前まで行き、そう聞いた。

しかし女の子はなにも答えず、黙って本を読んでいた。ぼくは少しむっとして、さらに大きな声で言った。

「なに読んでるの!」

すると女の子はようやくぼくに気付き顔をゆっくりとあげ、ぼくをみた。

「星の王子様」

女の子は小さな声でそう答えた。「星の王子様」というタイトルは聞いたことがあるがぼくは読んだことはなかった。

「へえ星の王子様か。おもしろいの？」

「うん」

女の子は短く返事をした。ぼくは次の言葉を探したがなんて言うたらいいのかわからなくなってしまった。急に恥ずかしくなってしまったのだ。さっきまであった勢いはぼくの中からすうつとぬけて消えてしまい、話しかけたことを少し後悔した。やっぱりなれないことをするものじゃない。女の子は首をかしげ、不思議そうな表情をぼくにむけた。そりゃそうだ。話かけておいて急にだまってしまうのだ。不思議におもうだろう。

「えっと。君は大江小学校に通ってるの？」

ぼくはなんとか考えついた質問をした。

「うん」

女の子はまた短い返事をしただけだった。ぼくはここで負けては

ならないと変な闘争心を燃やした。

「そうなんだ。ぼくも大江小学校に通ってるんだ。何年生なの？」

「6年生だよ」

驚いたことに女の子はぼくと同じ学年だった。

「えっそうなの？ぼくも6年だよ」

「わたし一週間前に転校してきたばかりなんだ」

女の子はぼくの疑問を察したのかそう言った。

「そっか。だからわからなかったんだ」

謎がとけてぼくは少し落ち着いていた。そしてあらためて女の子を見た。白い肌に大きな瞳。その整った顔立ちはとてもかわいかった。

こんな子が転校してきたのなら話題のひとつにもなるだろうに。ぼくは転校生がやってきたことすら知らなかった。

「転校生が来たなんて知らなかったよ」

「わたし転校してきて一回も教室に行っていないから」

「えっなんで？」

「苦手なんだ。人がいっぱいいるところが」

女の子は少し表情を暗くしてそう言った。ぼくはなにかまずいことを聞いてしまったのではとあせってしまった。

「じゃ、じゃあさ、ぼくと友達になろうよ」

「え？」

「ぼくと友達になろう。ひとりにいるより友達といたほうが絶対楽しいよ」

そう言っただけはまた後悔した。今あつたばかりなのに何をいっているんだぼくは。ほんとうに今日のぼくはおかしいぞ。

「ありがとう」

そう女の子は言った。ぼくは意外な答えに少し驚いた。そんなぼくの表情を見て女の子はクスクス笑った。

「よろしくね」

「お、おう。よろしく」

それからぼくも女の子の隣に腰掛け、それぞれの名前を言いあっ

た。女の子はランという名前らしい。こう書くんだよとランちゃんは漢字を空中に書いてみせてくれたが、ぼくにはどんな字なのかさっぱりわからなかった。そしてランちゃんが引越してくる前に住んでいた町の話やお互いの好きな本の話をした。ランちゃんは海のある港町から親の都合で引越してきたらしく、この神社には今日始めて来たのだそうだ。

そしてランちゃんは本がとても好きらしく、ぼくの知らない本のタイトルをたくさん教えてくれた。ぼくは本といってもマンガしか読まないで最近ハマっているマンガの話をした。ランちゃんはマンガはあまり読まないみたいだったが、ぼくのマンガに対する熱い思いを真剣に聞いてくれた。女の子の友達で、マンガの話をもっと聞いてくれる子が周りにはいなかったのだからぼくはうれしかった。ヒートアップしたぼくはマンガの主人公の必殺技のモノマネまでもランちゃんの前で披露した。

「ほんとにマンガ大好きなんだね」

ランちゃんは笑いながらぼくに言った。

「めっちゃめっちゃ面白いんだから。今度貸してあげるよ」

「ほんと！ありがとう。じゃあわたしのお気に入りの本も貸してあげる」

話しているうちにランちゃんもぼくに心を開いてくれたのか、最初より声も大きいし、なによりこんなに笑う子だとは思わなかった。

「ありがとう。でもマンガの読みすぎには注意しなよ。ぼくみたいにテストの成績悪くなっちゃうから・・・あっ・・・」

そう自分で言った瞬間、自分のこの後の現実を思い出してしまった。急に元気のなくなっただぼくを見て、ランちゃんは「どうしたの？」とぼくに言った。

「いや、実は今日返してもらったテストの成績が悪くてさ。このあと親に見せなきゃいけないのを思い出しちゃったんだ」

ぼくはあたまを抱えながらそう言った。

それを聞いたランちゃんは、一瞬目を細めた後、ぼくの目をじっ

とみつめてきた。ぼくは少しとまどい「どうしたの？」と今度はぼくがランちゃんに聞いた。するとランちゃんは微笑み、「大丈夫だよ」とぼくに言った。

「え？なにが大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。心配しなくてもお母さんには怒られないと思うよ」  
そうランちゃんは言った。やけに自信のある声だった。

「まさか。あの人が怒らないわけないじゃん。でもありがとう。そう言ってくれると、ぼくも少し希望がもてるよ」

そうぼくが言ったとき、あたりに5時をつける音楽が響いてきた。  
「そろそろ帰ろうか。ランちゃん、明日もここに来る？」

「うん」

「よし、じゃあまた明日ここで会おう。マンガ持ってくるよ」

「うん。わたしも本持ってくるね」

ランちゃんはそう言って右手をぼくの前に差しだしてきた。ぼくはなんで右手をだしてきたのかわからず首をかしげた。

「ばいばいのあいさつだよ」

ランちゃんは言った。ぼくはなるほどと思い右手をだしランちゃんと握手を交わした。

「じゃあまたあした」

「またあした」

そう言ってぼくとランちゃんはお互いの家に帰っていった。握手して別れるなんておしゃれなことをするなとぼくは思った。

ランちゃんと別れたあとの帰り道はまさに地獄だった。ランちゃんと話をして少しは気がまぎれたものの、母にテストを渡さなければならぬという現実は少しも変わらない。なんてこの世の中は厳しいところなんだ。

家の前につき、ぼくは深呼吸した。そして覚悟を決め、ドアノブを回した。

「ただいま」

緊張のせいか声がうまく出ず、かすれたただいまになってしまった。

「おかえり」

リビングのほうから母の返事が返ってきた。心なしかいつもより優しい声に聞こえた。

ぼくはリビングに入り、ランドセルをソファの上に置いた。

「亮二、先生から聞いたよ」

そう母はぼくに言った。ぼくはいよいよ顔が真っ青になった。

「え、聞いたってなにを？」

まさか先生から100点だったことを聞いてしまったのだろうか。

亮二君をもっと勉強させてください。このままじゃ亮二君とどんな他の子と差がついてしまいますよ。

まさかね。先生が母にわざわざ電話してまでぼくの点数を言うなんてあるわけないじゃん。もしかして母が学校に電話して点数を聞いたのだろうか。まさか。いくら母でもそんなことするわけないよ。だけど母が先生から何かを聞いたことは確実だ。なんだ、何を聞いたんだ。

「この前やったテストあんた100点とつたんだってね！」

「へ？」

ぼくは想像もしていなかった母の言葉に一瞬あたまの中が真っ白になった。

「先生から電話があつてね。亮二君すごく頑張りましたよって。すごい誉めてたよ！あんたやればできるじゃん」

そう言つて母はぼくのあたまをなでた。母は、先生は何を言ってるんだ？ぼくは100点じゃなくて10点だぞ？

ぼくはもう何がなんだかわからなかった。だけどこれはチャンスだ。先生も母もよくわからないがぼくが100点だったと勘違いしている。このまま流れにのっけてしまおう。

「そ、そうなんだよ。い、いや、ぼくもやればできる男なんだよ。

ぼく天才かもね」

「なに調子いいこと言ってるのよ。でもほんとよくがんばったね。今日はごちそうつくるからね」

「や、やったー。じゃあぼくごはんまで部屋にいるね」

そう言っただけはランドセルをかつぎ2階の自分の部屋まで行った。

ドアを閉め、ぼくは部屋の中で茫然と立ち尽くした。

どうなってるんだ？

ぼくはランドセルのふたを開け、中にあるテスト用紙を取り出した。そして改めて点数をのぞき見た。そこには「100点」と書かれていて、その横には大きな花マルが書かれていた。

ぼくは自分の目をうたがった。目をこすり、もつと近くでよく目をこらして点数を見た。だがそこにはまぎれもなく100点と花マルが書かれていた。あれだけバツが多かった回答欄もマルのオンパレード。名前もぼくの名前だった。

何がおこったんだ？確かにぼくは10点だったはず。神社でテストを握っていたときも確かに10点だった。何度も確認したし、横に0を自分で書いてしまおうかとも思ったほどだ。

だが今ぼくが手に持っているテストの点数は確かに100点で、母も、先生ですらぼくが100点だったと言っている。勘違いしていたのはぼくのほうなのか？

ぼくはあたまが混乱し、ベッドの上にドカンと腰をおろした。きつとぼくが勘違いしてただけだろう。きつと悪い夢を見ていたんだ。よかったぼくの勘違いで。

時間がたつにつれてぼくもだんだん落ち着いてきた。そして緊張がとれたせいも急に眠くなってきた。ぼくはベッドの上で横になり、目をつむった。

ほんとよかった。

ぼくはそう呟いた。

そのとき、あたまの中で別れ際のランちゃんという言葉がよみがえってきた。

「大丈夫だよ。心配しなくてもお母さんには怒られないと思うよ」  
明日ランちゃんに貸すマンガは何にしようかな。そうだがあれがい  
い。きつとランちゃん喜ぶぞ。

そんなことを考えているうちに、ぼくは深い眠りの中へと入って  
いった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5082q/>

---

約束

2011年1月30日01時25分発行